

# 琉球大学学術リポジトリ

## 日研究生のクラスから

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2008-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 公子, Tamura, Kimiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/6581">http://hdl.handle.net/20.500.12000/6581</a>

## 日研生のクラスから

田村 公子

### 1. 日本の文部科学省の奨学生

筆者は平成6（1994）年10月から11年間、日研究生（日本語・日本文化研修留学生）の特別課外補講を担当した。授業は最終の1年半を除き、週2コマ（90分×2）だった。学生は毎年3～8人、国籍はウクライナ・オーストリア・オーストラリア・スイス・スペイン・フランス・ベルギー・ペルー・ラトビア・ロシア他22カ国、年齢は19～28歳だった。ほとんどが日本語を専攻する学生だったが、文化人類学や建築学、コンピュータを専門とする学生もいた。また、各国の選考基準で選ばれてくるので、日本語力に差があった。それ以上に、日本文化への関心の異なりが大きかった。この落差をどう埋めるかが大きな課題だった。授業は、レジス・ドブレ（1940-）の言葉を借りるなら、「伝達」と「コミュニケーション」を共に得させることを目的とした。文芸作品の音読を通して日本文化を「伝達」し、学生が得た理解や感動を材料に、他者と適切に「コミュニケーション」する能力の涵養に努めた。そのために音読技術の習得とエッセイによる自己表現力の養成に力を注いだ。視聴覚情報を増やすためにNHKの教養番組を利用したが、難しい語句や概念は「解説」をプリントして理解を助けた。教材作りと格闘した11年間であった。

以下に、クラスの様子と感想文の一部を紹介する。

### 2. 知的欲求－1回生（平成6年10月から7年9月まで）

J君（ブラジル）は憤懣やるかたなかった。当時はまだ留学生が専門科目を受講できず、J君は希望するウチナー口講座を取れなかった。筆者はウチナー口は教えられないが、何とかしてJ君の知的好奇心を満たしてやりたかった。そこで、①外来思想－仏教・道教・儒教、②日本の思想－古代から近代、③日本人のものの考え方－間接的文化受容の歴史の影響、④日本と朝鮮半島の交渉史－古代・日本文化の北方的要素、⑤日本の神話－「古事記」に見られる南方的要素・日本人の特性を学習事項とし、『日本語ジャーナル』中の特集「日本の神様たち／日本人の宗教観」（出版社は略す。以下同じ）、貝塚茂樹『論語』、守屋洋『中国古典百言百話6 老子・荘子』、蜂屋邦夫『老荘を読む』、トルストイ（中村白葉訳）『イワンの馬鹿とその二人の兄弟（副題

は略す)』, 鈴木孝夫『閉ざされた言語・日本語の世界』, たかしよいち『日本人の来た道』, 鈴木三重吉『古事記物語』, 九州高等学校社会科教育研究協議会『倫理資料集』, 外山滋比古『日本の文章』, 「犬棒かるた」などを使用した。1年の終わりに, J君は丁寧に礼を述べ, 満足して帰っていった。

### 3. 「スーパー歌舞伎ヤマトタケル」 - 2回生 (平成7年10月から8年9月まで)

前年の反省から読みやすいテキストを選び, 豊田豊子ほか『日本事情シリーズ 日本の歴史』(凡人社), 松井嘉和・松本圭司『日本語学習者のための日本文化史』(同上)を主教材にした。「古事記」を読んでいたので先史から始め, 人々の暮らしや文化を伝える映像資料を併用した。ビデオ起こしの一例は, 「日本の伝統 - 初詣でと和歌を中心に」, 「国風文化の隆盛 - 藤原氏の摂関政治」, 「中世への転換期を生きた詩人 - 西行」, 「『古事記』中巻より『倭建命』」などである。ビデオはいつも難度が気がかりだった。特に, 市川猿之助の「スーパー歌舞伎ヤマトタケル」は3時間と長いし, 言葉も聞き取りにくいので躊躇されたが, 途中で解説を入れ, 90分×3回に分けてやってみた。Eさん(ブルガリア)は一瞬も目を逸らさず鑑賞していた。また, 将来は西行を研究したいと言っていた。

### 4. 『古事記物語』の感想 - 2回生

Jさんは日研究生ではなかったが, 授業に参加していた。以下はJさんの感想文である。

私は二年くらい前に, タイの大学の日本文学の授業で古事記のことを勉強したことがある。その時, 子供のために書いた日本語の古事記とタイ語に訳したのも少し読んだけれども, あまり気にしないで, 勉強が終るとすぐ忘れてしまった。(略)そして, 古事記の内容の方は日本人の生活に入っていると分かった。例えば, 私はタイにいる時, たくさん日本の漫画を読んだが, ほかのことについての漫画だったけれども, 古事記物語の内容とか, 古事記にでてくる神様をまねして書かれていた。ある漫画は古事記物語の内容を全部取って, 作ってあった。(略)私は英語で昔のギリシアの神様を勉強したことがあるので, 古事記物語を勉強して, ある物語の構造がヨーロッパの神話物語と一緒に感じて, ちょっと驚いた。日本人の神話はヨーロッパ人の神話に似ていて, たくさんの神様を信じて, 勇士もいっぱいいる。しかし, 日本の神話は西洋人のものをまねたわけではないと考

えた。タイはヨーロッパより日本に近いのに、大体タイの物語は仏教によって作られ、日本と違う。タイはあまり神様のことがないと思った。(後略)

#### 5. 質問魔, 思わぬ文化比較 (認識のずれ) - 2回生

「イズモのドラゴンの話も読みたい」という、1回生のJ君の希望で始まった「古事記」講読だったが、上の感想文に見たように、日本の過去と現在、日本とタイ、日本とヨーロッパを比較するよい材料となった。文化比較の好例をもう一例紹介する。

前述したEさんは質問魔で、母国では教師に質問を禁じられていたという。筆者の授業では、質問はいつでもしてよい事にしていて、奈良時代を勉強していた時だった。称徳女帝と僧道鏡にまで話が進んだ時、「それはニジョウのような関係か」と訊かれた。それは「とはずがたり」を書いた後深草院の女房二条のことだった。二条の赤裸々な告白をロシア語で読んだという。ロシア語に翻訳されているくらいだから、日本人なら誰でも読んで知っているものと思ったという。日本人の読者は少ないと答えると、訝っていた。

#### 6. 仲良しのクラス - 2回生

2回生の前半は、協定校のキャンベラ大学から初級の女学生二人を迎え、「合同クラス」を設けた。音読教材として、筆者現代語訳「因幡の白兎」、小学国語より木下順二の「夕鶴」「附子」、玉村文郎・千恵子「つるの恩返し」「ちごとぼたもち」「かぐやひめ」「鼻が長いぼうさん」(『読解 現代文で読む古典と民話-日本の文学-』)、日本古典文学大系より「竹取物語」(『中学国語1年』)、秋元美晴・糸川優・寺島ミチ子「鼻」(原作 芥川龍之介)(『中級日本語学習者・帰国子女のための読解教材-どんだん読めるいろいろな話-』)、宮澤賢治「セロ弾きのゴーシュ」, 「犬棒かるた」などを使った。授業に先だって上級者たちに、初級者との合同クラスを作る旨告げると、S君(タイ)が、「僕たちが教えてあげればいいのね」と言ってくれた。心配した日本語力の差は問題にならなかった。逆に、この差は共助、共学、共育に役だったといえる。

翌学期は予算削減のため、「合同クラス」はなくなった。しかし、学生たちが磁石に吸い寄せられるように集まってくる。そこで、仲良したちが一緒にいられるよう自主講座を設けた(7回)。書道の実際や書道具作りの現場を撮したビデオを流しておき、学生たちに自由に書道を楽しんでもらった。

7. 日本通の二人と素朴なイスラムの青年－3回生 (平成8年10月から9年9月まで)

3回生の一人は日本歴史に詳しく、もう一人は日本文化通であった。それで学習項目「日本の伝統文化を生み出した歴史の理解」、「日本の伝統芸能の理解と鑑賞」を追加し、前年の凡人社の二冊と、平田悦朗『伝統芸能－能・狂言・文楽・歌舞伎』(凡人社)を主教材とした。二人の研究範囲の時代を考慮し、鎌倉時代から学習を始めた。「古事記」は読まなかった。ビデオは「NHK 教育セミナー 歴史でみる日本」、「NHK日本の伝統芸能鑑賞入門」などを利用し、狂言「鞍猿」「附子」「棒縛」、歌舞伎「操り三番叟」、文楽「曾根崎心中」、薪能「湯水龍女」などを鑑賞した。また、この年から宮澤賢治を読み始めた。

A君(エジプト)が遠のいていった。三人のうち一番若く、日本文化についても二人ほど詳しくなかった。ある日、「僕は日本語の勉強だけでいい。文化とかは要らない」と言い出した。「金曜のお昼の礼拝は特に大事で、グループですることになっている。だから、金曜の授業は出られない」。その後は、授業の後にやって来て話していたり、夕方電話を掛けてきたりした。悩みもあったようなので、聞き手に徹した。

8. トラブルに遭遇－4回生 (平成9年10月から10年9月まで)

4回生三人のうち、一人はトルコからだった。途中から日本国際教育協会派遣の二人の韓国人が加わり、出身国の特徴を生かして、宗教や文化の違いを学習できた。落伍者を出してはならなかった。この回からは、前述の凡人社の教材は使わず、「古事記」から筆者が要約した数編、「桃太郎」、「かぐやひめ」、宮澤賢治の童話などを讀んだ。また、学生の要望で、「正しい敬語の使い方、敬語を生み出した日本社会の理解」を加えた。

トルコのDさんが2ヶ月くらい食欲がなく、お菓子しか食べてないというので、知人に頼んで「お茶」を体験させてもらった。立礼式でお茶を点て、喫し、懐石料理をいただいた。この縁で、別の機会には、浴衣や祭りやホームステイを体験させてもらった。

いつもはおとなしいM君が、何を切っ掛けにしてだったか、日本の歴史を話し始めた。滔々と、正に捲し立てるようにしゃべっている。筆者はM君の知識の豊富さを心から褒めた。あとでDさんが、教師とトラブルがあったと教えてくれた。体中に怒りが渦巻いていたに違いない。しゃべったことでカタルシスが得られた。二人は難局を乗り越えた。

9. 宮澤賢治の作品を読む－5回生以降（平成10年10月から17年9月まで）

5回生からは、主に宮澤賢治の童話を読むようになった。感想文の一部を紹介する。

「心の声」（T君，インド）（「虔十公園林」を読んで，抄）（母国での作文経験なし）

杉の木を切るという事例をとりあげると、背後には哲学的な要素があるのではないかと思います。森の全部の木の枝を切るとは実は手間のかかるよほどの労働ですが、虔十の場合をいいますと、それを張り切って、心の声に素直に従った態度で行ったからこそ平気で楽しみながらできたのだと思います。そしてそこから彼は満足感を感じました。こういうことは果たして何だろうと立ち止まって考えますと、俗にいう実用的な瞑想なのではないでしょうか。／世の中には、皆それぞれの心の声が聞こえますが、それに従う人は果たして何人いるのでしょうか。だが、時にその声が鮮明に聞こえてそれなりに行動する人が生まれます。そういう人がよく「いわゆる社会」に批判されたりしますが、最終的にはいつも虔十みたいに伝説として生き残っていきます。

「デクノポーには自信を感じさせよう」（I君，韓国）（「虔十公園林」を読んで，抄）

デクノポーには愛が大切であるけれども、それよりは自信を感じさせるのが、一番大事なことだと思う。自信があつてこそ、デクノポーは自力で独立することができるからだ。（略）／この作品の最後は虔十を誉めるような形で終わっている。結果的には偶然、虔十のわけも分からなかった行動が実を結んで、まるで予知能力があつたのではないかと思えるほどだが…。しかし、それは偶然であるのみ、それより、彼を本当に愛していたのなら、家族は彼に生活に必要なものを教えるべきだったと思う。

「菜食主義より大切な事」（Rさん，中国）（「ビジテリアン大祭」を読んで）

私はいわゆる菜食主義を尊重するが、もったいないなあと思った時もある。肉がこんなにおいしく、栄養があるのに。でも、われわれが消費する豚や牛を出荷できるまで養うのに、大量の穀物が費やされる。今日、アフリカでは、肉どころか、五穀さえ足りず、飢えている人が大勢いるそうだ。新聞で見た統計だが、われわれが肉食をどれぐらい控えたら、どれぐらいの餓死の淵に立っている人が救われると。何と情けない事だろう。自分は肉をおいしくかんでいる時、向こうは骨と皮ばかりの子供。想像してみたら、もうビジテリアンになってもいい、なるうかなとも思ったが、とうとうまた目の前の肉にそそられ、食べてしまった。人間はもともと雑食動物だし。／ただ、あの人々のために、何かやるべきではない

か。例えば、個人としては浪費しないこと、国としては食糧とか技術を援助する等。皆同じ人間だから、平等で幸せに暮らしていきたいのだ。

「生き物の価値」(K君, アメリカ) (「なめとこ山の熊」を読んで, 抄)

アフリカなどでは食べ物もない人が沢山いるのに家の犬や猫に毎年何万円もかける。人間という動物も大事にするべきだ。熊の口に言葉を入れてみるとその親子の会話は人間のそれと変わらない。だから動物を大事にしましょうと言うならもうすでに言葉を使える人間はどうだ。動物は確かに大事にしなければならない。人間も動物の内なのだ。

「『なめとこ山のくま』を読んで」(Yさん, スロバキア, 抄)

自分が生きるために、他の生き物を殺す必要がないという理想的な考えを人間は持ちたいです。しかし、実際にはどうですか。人殺しをしなくても、毎日人間は生き物を殺すのではないですか。毎日思わず、小さい虫でも殺さざるを得ないです。だから、どうして殺すことは人間の世界で罪としてみられていますか。それは多分、自分の感情がその中に入っているからなのではないですか。私も先にかわいそうな気がすると書きました。殺す事実だけではなく、殺すことに対しての感じも、殺す以外の方法がなく、みんなが悩んでいるしかないということも分かったら、何となくかわいそうなのではないかと私は思います。

「情のある猟師」(Rさん, 中国) (「なめとこ山の熊」を読んで, 抄)

こんな小十郎は本当に熊が好きで情のある人間だと思う。だからこそ、熊の毛皮と胆を荒物屋に売る時、いくら値切られても、別の店へも行かず、気も悪くしなかった。高く売ったら、まるで自分はお金のために熊を殺したのではないのかと思う考えが心の底に潜んでいるのだろう。

「違う視点」(R君, アメリカ) (「なめとこ山の熊」を読んで, 抄)

そこで、小十郎に対して、相手の幸福を前提として考えた価格で荒物やが熊の皮を買わなかったこと(罪?)によって、輪廻世界では、人間以外、たとえば、虫や動物といった、下位の形での存在に生まれ変わるでしょう。だが、主役である小十郎も熊に対して、罪を犯している結果、もともと彼も、この下位の形で生まれてくることはほぼ決定されている。その結果、だれが悪人であるか、また、どの悪人がより、「悪質」であるかが分かりにくくなります。(略)小十郎は他の荒物やへ行こうと思えばいけないことはありませんでした。よって、自分で判断した上、その価格で売った小十郎はその価格で売った結果を受け入れなければな

りません。もちろん、厳しい解釈ではありますが、彼自身が本当に熊のことを考えたならば、殺す熊の数を最小限に抑えるために、一つの毛皮からの最大限の利益を得ようとしたはずであろう。だが、考えなければならないのは、なぜ小十郎は熊を殺すことを選んだかである。それは、彼の家族が生き続けるためであった。物語では、この状況に彼を追い込んだのは、社会である。そうであるなら、この社会はどう裁かれるのでしょうか？それでいて、小十郎はその社会、荒物やに比べると、どの程度悪人であるのでしょうか？このように、状況によって変化する相対主義的な決断で良いのでしょうか？／（略）悪にはそれなりのレベルというものがあって、ある状況では悪であって、他の状況では悪ではないというようなあいまいで矛盾した価値観というのはどうしても理解できない、というより、納得できません。そうであれば、社会的にその決断を下せば、「悪」と判断されていたものが「正義」になる恐れがあるのでは無いでしょうか？

「死ぬのは自然だ」（Aさん, ポーランド）（「なめとこ山の熊」を読んで, 抄）

小十郎の日常の仕事はくまを殺すことだったので、ある日自分で狩りに行く際に、命を失う可能性があるかと前もって知っていただろう。勿論、誰も大切な命を失いたくないと考えるのは当然だけど、他方では人はある日死ぬことになるを知っている。だから小十郎の世界ではある意味ではくまに殺されるのは普通のことではないか。殺したのは偶然だったが、この「偶然」はいつもいつかは来るだろう。だから来た。小十郎が命を奪われたのは自然のことだったかもしれない。

『よだかの星』を読んで」（Sさん, 韓国, 抄）

また生きるために他の生命を絶つものもたくさんいる。人間がその代表的な例である。だからといってそういう人間が間違っているというわけではない。大事なものは生きるために他の生命を犠牲にさせなければならないという循環の中で、自分が「生きている」ということの大切さや謙虚な姿勢、またお互いに尊重し合う心を持つことだと思う。

「よだかの星について」（Zさん, ハンガリー, 抄）

一生のうちで、外見とはそんなにも大切なのか。私はそう思わない。あるフランスの作家の有名な言葉で言えば、「一番大切なものは、目に見えない」ものである。

「セロ弾きのゴーシュを読んで」（Yさん, スロバキア, 抄）

しかし、音楽も自然も言葉がなくても、話すことができます。自然を見ると、



音楽を聞くと私達も宇宙の存在の一つにすぎないということが分かります。それを忘れないようにしてもらいたいというのがこの作品の言いたい意味なのではないでしょうか。

「セロ弾きと動物」(Sさん, コロンビア, 抄)

人間が自然から学ぶ, 教わる, 又, それによって救われる。これが今まで読んできた宮沢賢治の作品の共通点だ。(略) 宮沢賢治の童話では, 人間はあくまでも動物の一種であり, 人間界も自然の中に含まれているに過ぎないということを伝えているのだと思う。(略) 不公平で, 矛盾で邪悪に満ちた人間界で, あえて生きる意味を見出そうとするなら, 自然を見つめなおすしか道はないと伝えているのだと思う。

「なぜ猫であろうか」(I君, 韓国) (「注文の多い料理店」を読んで, 抄)

この作品で賢治が言いたかったのは当時の国際情勢であったかもしれないということひょっと思いついた。西洋の音楽, 特にチェロが大好きであった賢治, 彼には西洋のものに対しての驚きと好奇心があったに違いないと思う。しかし, その中で彼は何か警戒すべきことがあるということ, この短い物語を通して語っているような気がして来るのは, 考えすぎであろうか。つまり, 猫は西洋, 料理店は西洋の文物, 道の案内者や犬は東洋の思想や国, 二人の猟師は日本のことを象徴していると思う。つまり, 太平洋戦争を批判しながら昔の日本に戻って来ることを願っている賢治の心を描いた作品であると思う。

(筆者注 賢治は太平洋戦争の前に死んでいるが, 普通西洋人だと解されている二人の猟師を, 日本の象徴だと見るこの見方は, 韓国人の視点と言えよう。)

## 10. 教えさせられて

琉大生たちの遅刻, 居眠り, 私語の多さに驚き, 「以心伝心」社会に戸惑い, 「建て前」を貫く日本人に憤りを覚えた留学生たちだったが, 「仏教」, 「沖縄の伝統芸能」, 「靖国神社」など, それぞれの課題に取り組んで研修を終え, 帰国した。学生達の熱意が私を教えさせた11年であった。他国を体験し, 自国を知る。異文化接触の効用はここにあるだろう。また, 留学生同士が, 第三国(日本)で知り合うことも貴重な実りをもたらすはずである。諸国民の友誼を願い平和を希求する島, 沖縄。この沖縄で学んだという体験は, 世界を破壊にではなく, 信頼と建設に向かわせると筆者は固く信じている。

最後に、「留学生の知性に見合った知的な授業を提供する」という識見をもって、  
筆者の授業を応援して下さった先生方に篤く感謝申し上げます。

(琉球大学留学生センター非常勤講師)